

# Somerset Maugham における旅

脇 田 勇

序 文

I. 三つの旅行記

II. Somerset Maugham と旅

序 文

*The Summing Up* 及び *Of Human Bondage* によって明らかのように、Maugham は 1874 年 パリー に生れた。8 才で父、10 才で母を失い孤児となり南英ケント州の宣教師の叔父に引とられた。牧師でありながら俗人の叔父のもとに不快な青春時代を過したのであるが、初めての故国英国の生活は Maugham の脳裡に深く刻みこまれたのである。胸の保養に南仏に渡り、恢復後ハイデルベルクに留学する。ここで過した自由な青春時代は *Of Human Bondage* に克明に記されている。後ロンドンに戻り、聖トマス病院附属医学校に入学する。産科の助手として、様々な患者に接触し、赤裸々な人生、人間への眼を開かれる。ランベスの貧民窟での治療の体験からはじめての長編 *Liza of Lambeth* が 1897 年誕生する。後ヨーロッパ大陸を旅行、スペインには二度も遊んだ。1903 年から三度目のフランスの生活が始まり、無名作家として極貧のボヘミヤン生活を送ったが、ようやく脚本で成功し始め、1907 年からロンドンに戻った。第一次大戦の勃発とともに軍医としてフランス戦線の各地に従軍、やがてスイスの諜報機関に勤務（この体験は後の短篇集 *Ashenden*, 1928 となってあらわれる）、疲労のため結核を再発、療養することになった。大戦後、療養しながらアメリカ、タヒチに幾度か旅行し、特命を受けてロシアへも入国したが、病が悪化し、スコットランドのサナトリュ

ウムに入院した。恢復するとインド、マレイ、タイ、中国、南洋諸島と前後三回も極東を訪れ、世界一周の大旅行を繰り返したのである。第二次大戦中は陥落寸前のパリーを訪れたりなどしたが、戦後アメリカを訪れ、筆を断ってから南仏リヴィエラ海岸の Villa Mauresque で 1965 年生涯の幕をとじるまで余生を送った。

このように 91 年間の彼の生涯を見てくると、まさに席の暖まるいとまのない旅の連続であり、コスモポリタンの生活であったと言える。

旅を続けた作家は多く見出されるが、その一人として Hemingway をあげたい。彼は米国中西部 Michigan 州に生れ、少年時代から狩猟や魚釣にふけり、父とインディアン部落の訪問などをして過し、水泳、フットボールに優れた技能を示し、第一次大戦の時はイタリア軍付としてヨーロッパ戦線に赴き、負傷をしている。1921 年 パリーに渡り、希土戦争には報道記者としてギリシャ軍に従軍などし、1924 年からパリー在住、スペインその他へ絶えまない旅を重ね expatriates との交友を持ち文学修業をはじめた。後アフリカ旅行を試み、1936 年 スペイン内乱の勃発とともに政府軍を援助、スペインと米国の間を往復して活躍した。第二次大戦となると再び中国やヨーロッパに渡り、大いに反ファシズム戦争に協力した。彼の場合は、この現代に生きている限り否応なしに政治的風土の中に追い込まれたのであり、彼の求めていたものは、複雑な政治や社会や人間関係を含む現代文明社会に見出し難い、人間の根源的生命力とでもいうべきものであった。

以上のように見ることを許されるならば、同じコスモポリタンの生活を続けていながら Maugham と Hemingway の場合とでは、社会とか人間への取組み方に自ら差違のあることを認めざるを得ない。Maugham には社会改革への積極的な意図など毛頭無いし、政治的色彩の濃い作品もない。結局は人生、人間に対する画然としたアプローチの差違ということになってくる。

筆者は、作家 Maugham 及び彼の作品を研究する上において、三つの

旅行記の持つ位置を考え、この作家の創作態度の底流をさぐりたいと思うのである。

## I. 三つの旅行記

Maugham は題材に窮するとなげく作家達を揶揄するが如く、「私にはひとつ得なところがある。題材に不足したことがない。書ききれないほどの話が、いつも頭の中にある。……私は誰かと一時間一緒にいれば、その人について、少くとも読むにたえる短篇小説を一つぐらい書く材料を、必ず得ることができる<sup>(1)</sup>といたい。心の中にたくさんの話を持っているので、どんな気分の時であろうと、一二時間のあいだ、一週間ばかりの間、ゆっくり空想することのできる題材がある<sup>(2)</sup>というのは楽しみなものである。……」と豪語しているが、この自信のほどを裏書するかのように、彼の半世紀にわたる作家生活への訣別を宣言した 1948 年の翌年 *A Writer's Notebook* を出版している。これを見ると彼の長篇、短篇の材料となっているメモに一驚させられる。例えば<sup>(2)</sup> 1916 年のメモによると、ハワイ旅行の時出会った宣教師、Miss Thompson、宿屋に関する三つの短い叙述があるが、この三つがこの作家の想像の世界で組合わされると名篇「雨」が誕生するのである。彼の作品にあらわれる場面、人物の多様さを考えてみると、彼の豪語のあながち誇張ではないことを知らされる。彼の旅は取材のためであったことは事実であるし、旅行記はそのメモであるが、短篇、長篇の source として研究者には貴重なものであるとともに、それ自体として、作家 Maugham を知る上の拠りどころとなりうることも事実である。

この小論では、*On a Chinese Screen* (1922), *The Gentleman in the Parlour* (1930), *Don Fernando* (1935) の三つを取上げるが、1905 年に刊行された *The Land of the Blessed Virgin* というスペインの Andalusia 地方の紀行が

(1) *The Summing Up*, Chap. 23.

(2) *A Writer's Notebook*, pp. 86-87.

ある。これは後に Knopf 社から出版のアメリカ版では *Andalusia* となっていて内容も改定されている。作家 23 才の青春の記録である。自作の最も厳しい批評家でもあった Maugham はこの書を ‘crude and gushing’ (未熟でセンチメンタル) であったと言っているし、スタイルについては ‘It has neither ease nor spontaneity. It smells of hot-house plants.’ と評している。別人の作としか思われないと Maugham 自身が語っているが、後の円熟した旅行記の片鱗はうかがえるし、また人間性の奇異に対する作者の眼は、スペイン人のうそつきの習慣の分析などに、あらわれている。しかしこの小論では詳述をさけ、主として上記の三つにのみふれることにした。

### 1. On a Chinese Screen

「印象が強かった事どもをノートにすることによって、諸君は心の眼に群がり過ぎゆく印象を絶間ない流れから切離し、諸君の記憶の裡に固定させることができる。」と *A Writer's Notebook* の序文で言っているごとく、メモはこの作家の仕事場であり、必要に応じていつも引出すことのできる創作の材料庫でもあった。

1920 年、太古からの文化を持つ神秘の国についてできるだけ多くの物を見、また経験を豊かにしてくれるさまざまな人に会おうと思って中国に旅立ち、興味ある人物や、珍しい見聞を長篇一冊分または短篇物のいくつかに役立つだろうと考えてメモを取ったのであるが、帰国して読んでみると、もしそれを一貫した物語に作り変えたならば失われるのではないかと思われるほどの生々しさを持っているのに気付き、そのまま *On a Chinese Screen* の名で 1922 年に出版するに至った。

彼の夥しい作品——戯曲 30、長篇 20、短篇 90、旅行記 4——の中でこの作品は必ずしも彼の代表作とは言えないかも知れぬが、58 章からなるこの旅行記は、巧まざる作家の一面がのぞいていて、作家へのアプローチの鍵を与えてくれる。

しばしば Maugham 研究者によって指摘されるごとく、異郷の旅にあっての彼の最大関心事は風土、思想、慣習、言語などにはなく、そこに生を営む人間である。特に、この作品の場合は舞台は中国でありながら実はそこに住むヨーロッパ人、ことにイギリス人が描かれている。同じ英国人が置かれた situation によって変貌する姿、すなわち環境の生物の考え方が実証されている。この傾向は *Ah King* (1933) の場合もまったく同じで、異国の生活の白人に及ぼす影響を描こうとしたのである。<sup>(3)</sup> 英国の作家にとって同国人のことを知るのさえ容易でない。アメリカ人、フランス人、ドイツ人を親しく知ることは不可能である。ましてや皮膚の色のちがう人種については何が知ることができるか疑わしい。このことを誰よりも知っていた Maugham の主題が限定されてくるのは当然とすべきであろう。

Maugham の人間観——一人の人間のうちに撞着する属性の共存の考え方——は随所にあらわれる。The Philosopher, The Cabinet Minister, The Normal Man などにこの人間観がうかがえる。どうにもならぬ大宇宙の中で、この世の些事に押し流される人間の哀感は、The Vice-Consul, The Taipan, Fear, The Beast of Burden, The Song of the River の中で描出されているが、人間のもがきとは関係なく流れ行く現実と対比された人間の空しさ、しかしその人間こそ興味つきない存在なのだとする肯定的態度がうかがわれる。

Maugham が <sup>(4)</sup> 'enigmatic' の評を得る所以は何か。信頼と疑惑、憧憬と虚無、冷笑と微笑という矛盾の中にこそ真の彼の姿があるのではなかろうか。ニヒルな一面のあることは否定できない。Of Human Bondage にあらわれる Persian rug の人生観——人生は帰する所一枚のペルシャ絨毯のようなもので、さまざまな絵模様を織りなしているけれども、ただそれだけのことで織ること自体には何の意味もないという考え方はたしかにニヒリズム

(3) *Ah King*, Preface.

(4) Richard A. Cordell, *Somerset Maugham*, Chap. 2.

かも知れない。しかしどこまでも沈潜して救いのないニヒリズムとは考えられない。彼は「自分は人生の模様をつくりたかったのだ。その中で書くことも本質的な要素ではあるが、人間本来のあらゆる他の活動もふくみ、最後には完全な終りとして死が仕上げるような模様である。」と語っている如く、cynical なもしくは ironical な表現をとりながらも、人生、人間への肯定的な態度を持っていたと言うべきであろう。このような彼の視点は、*The Stripling*, *The Song of the River*, *The Plain*, *The Fragment* 等にあらわれている。

<sup>(5)</sup> Cordell も指摘している如く、作者は事実を歪曲したり、貶したりなどせず見たり感じたりしたことを忠実に報告している点をあげねばなるまい。美しいものと同時に醜いもの、親切さと同じく残酷さも記述されている。彼が東洋の島々やマレイで発見したように、東洋の生活は、植民地の人間の最悪の特質——不寛容、地方的偏見、もったいぶりを引出している。この書に出てくる英国人はほとんどいやらしさに満ちた姿で描かれる。中国の芸術にも装飾にも無知な一婦人は彼女の居間を Tunbridge Wells の絢爛たる部屋を模倣してこしらえている。植民者たちのはげしい倦怠と嫉妬はうんざりするような晩餐会であらわれる。大言壮語する社会的、政治的な自由主義者は、不注意な人力車引きの少年を蹴とばし罵るのである。若い医者 of 宣教師は、ひと財産こしらえるために、理想主義を放棄する。煙草会社の役人は自分の周囲の華やかな、活気ある生活に目をとじて、余暇をアメリカの冒険雑誌を読んでつぶす。環境の支配をうけた紳士の国の人々の変貌が、リアリティックに語られている。

## 2. The Gentleman in the Parlour

1930 年は Maugham 56 才の時であり、作家として油ののりきった時であったと言える。彼自身最も愛する作品である長篇 *Cakes and Ale* が出版さ

---

(5) Ibid., p. 217.

れているし、最後の drawing-room comedy である *The Breadwinner* が上演されているし、その上作者お気に入りの *The Gentleman in the Parlour* の出た年でもあった。彼は内容は勿論、文章に意を注いだのである。*Travel Books* の序文で「もしあなたが言葉というものの自体が好きであり、自分の気に入る言葉を、美の効果をあげるように順序よくつなぎあわせることが楽しいとしたら、随筆または旅行記が、一つの機会を与えてくれる。」と語っているが、その実験をしているのがこの旅行記である。例えば美文調の息の長い自然描写、起承転結の整った短篇、人物の戯画、ユーモラスなエピソード、それに恐らく彼の唯一の童話である *Princess September* まで実に多彩である。一貫して流れているのは作者の貪欲なまでの人間への関心で、アンコール・ワットの建築様式の中においては、人間の営みの図に注目し、人間の生活は千年間少しも変わっていないと感嘆する。この旅行でも著者は興味ある人間の蒐集に終始していると言っても過言ではない。彼にとって最も印象的なもの、最も畏れをいだかしめる古代の monument は、寺でもなく、砦でもなく、大きな城壁でもなく、人間であったのである。

この旅行記はインドシナ半島旅行の記録で、ビルマのラングーンを起点としてイラワジ河をパガン経由で渡り、マンダレーに行き、ロバの背に乗ってシャン州に入り、サルウィン河を渡ってシャム（タイ）を訪ねる。バンコクからカンボジアのアンコール・ワットの見物に行く。そこからメコン河を下ってサイゴン着。さらにアンナン（ベトナム）の首都ユエ、車でハノイ、ハイフォンまで北上する。数週間もロバの背にゆられて、ジャングルを行進、この広い半島をかなり広範囲に廻ったのである。

イラワジ河をパガンに上る船中で Hazlitt の選集を開き、その明解、簡潔な文体に読み耽けるうちに、*On Going a Journey* という一篇に出くわすが、その中にこの表題の *The Gentleman in the Parlour* を見出すのである。

一二の Maugham らしい観察を述べてみよう。サイゴンに着き、アン

ナンのユエへの旅の所で、植民地の原住民に対するフランス人の態度には、イギリス人の場合と違いのあることを認める。フランス人は自分の偏見を原住民に注入し、パリーは世界の中心であり、フランス外には芸術も文化も科学もないと信じさせる。しかし普通の生活では、原住民も自分と苦楽を共にする人間と感じ、共に飲食し、共に遊ぶ。ビルマ人はイギリス人を尊敬するだけであるが、アンナン人はフランス人を賞讃する。やがて自由を取戻したあかつき、これらの感情のいずれがよい実をむすぶかを見るのは興味深いと言っている。

香港へ出帆の前日、浮浪者風のイギリス人の訪問をうける。ロンドンの聖トマス病院付属医学校で Maugham と同級生であったことがわかる。女に身をくずし退校した人間であった。その後中国に渡り、中国の税関吏となり阿片密輸の取締りをしていたのである。彼の家を訪ねてみると、原住民の女と結婚し、子供も一人もうけ、五年間も住んでいるのであった。税関吏として二十年間働き、小金を貯めて英国に戻ってみると英国はまったく異国となっていて、再び中国に帰る決意をする。上海への途中、ハイフォンに上陸原住民の女と一夜をあかすが、それが現在の妻であった。今一步の所で中国にたどりつけない。中国は今彼に残された唯一の夢であったが、その夢に挑めず沈潜してしまったのである。

この旅行記は、トピックが多岐にわたって潑刺としている。描写、会話、哲理、さらに幻想でさえもがたくみに混り合っている。ユーモア、ランプのひとり遊び、帝国主義、食料、悪の正当化、イギリスの散文などのような問題についての肩のこらないエッセイがある。

*On a Chinese Screen* よりも入念な規模、明確な型にはまる形式を求めている。旅行の経過を忠実に追ひ、前者の如く断言的でない。しかし依然として彼の興味の対象が人間であったことを認めざるを得ない。この書物はあくまでも楽しみをもって書かれてあり、<sup>(6)</sup>スタイルの実験場でもあったという

(6) *The Gentleman in the Parlour*, p. vii.



意味で、研究者の注意に値する作品の一つと言えよう。

### 3. Don Fernando

Maugham のスペインに対する興味は、かなり昔にさかのぼり、それが *The Land of the Blessed Virgin* となって刊行されたことは前述の通りである。前後 13 回にわたり スペイン旅行が試みられたことから、この作者のスペインへの関心がいかに強烈であったかが想像できる。

今日 Maugham 研究者に多大の示唆を与えているこの書も、あまり多くの読者をもたなかった。理由は、16 世紀のスペインの所謂黄金時代に関する書物を読みたがる人は、きわめて少なかったことによる。初版は 1935 年であるが、Desmond MacCarthy, Raymond Mortimer, Graham Greene 等の批評を参考に、改版した。同書の序文には「作者が自分にとって役立てることのできる、自作の批評にぶつかったためしはめったにない。せっかく利用できるのに、利用しないのは愚の骨頂である。」と記されているが、一つは多くはすでに他の本に述べられたことと指摘された事項、第二には当時英国の旅行者たちにスペインの語句を教える目的で書いた会話の部分が省略されたのであった。彼はスペインを舞台にした小説を計画しており、スペイン語で二百冊の本を読み完成を志したが、ついに実らなかったと言っているが、その研究が *Don Fernando* となり、またその一部を用いて二十年後に、最後の小説 *Catalina* (1948) を書いている。1930 年に *Cakes and Ale* が出、1938 年に *The Summing Up* が出ていることを考えあわせてみれば、完成期に到達した Maugham の探究の鍵が蔵されているという事ができる。文体自身も、口語体に時々古めかしい単語を交え、常套句を用いた美文である。

*Don Fernando* は、セビリア滞在中、彼が出入していた居酒屋の主人で、この男から一冊の古本を買わされる。実はそれがイエズス会の創始者 Ignatius Loyola の伝記であった。小姓、兵隊、学者、社会改革者、教育者などを経て聖者となったこの人物が伝記的に述べられている。特に 'Spiritual

Exercises' (靈操) の内容が詳述されている。Cordell は作者の意図が、黄金時代のスペインの日常生活、芸術、文学、演劇、変った人物、宗教の描写にあったのだから、イエズス会士の宗教的な著書の分析などしなかった方がよかったのではないかと評している<sup>(7)</sup>。たしかにはじめの部分のかなりの頁にわたるこの叙述から、多くの読者が倦怠を覚えるということは否定できない。無宗教とも言える作者が、このカトリックの聖者の克明な描写に全巻のほぼ三分の一の頁を何故さいたかの疑問が持たれる。名門の家柄に生れた Ignatius Royola が武芸の修練に専心、フランス軍との戦いで傷つき、恢復期にあった時接したキリスト一生に関するものと「聖なる花」という聖人の物語によって、キリストの道に従う決心をする過程が、小説家 Maugham の人間探究のアンテナに触れたとみるのが妥当であろう。

話題は picaresque novel (悪漢小説) に移る。Vincente Espinel や Mateo Aleman を語り、更に Cervantes を論じ、劇作家 Lope de Vega に及ぶ。悪漢小説の扱いかたも、文学史的な意味を述べるのではなく、そこにあらわされた下層社会の赤裸々な人間性に対する興味が語られている。スペインが Maugham の心を捉えてやまないのは、人間にとって最も本質的なしかも相反する要素——物質的なものと精神的なもの、現実的傾向と空想的傾向、実存性と神秘思想——が強烈に感じられることにあると言える。

Don Fernando の九章は画家 El Greco に当てられている。彼は El Greco が古今にわたる最大な画家の一人であるとし、その作品「オルガス伯の埋葬」は世界の傑作の一つであると激賞する。今日彼が生きていたとすれば、Bracque, Picasso, Fernand Léger に比すべき作品を画くであろうとも言っている。El Greco にひかれる所以は作品のうしろにある個性だとし、その個性から出る最も真剣な感情を、カンバスに塗る色彩の中にあらわしたとしている。もう一つの注目すべき点は、芸術に対する彼の視点である。芸術家は、水が低い所へ流れて行かざるをえないように、ものを創造せざるを

(7) Cordell, *ibid.*, p. 223.

得ない。それは自分の魂にかかる重荷からの解放である。それは無限の喜びを持つ精神の修行であり、それに、それ自身喜びを感じる力の意識が伴う。制作によってそれを果した時には、芸術家は、他には得られない解放感を味わう。その甘美な瞬間に、平静な心を得て憩うことができる。画家が描くもの、あるいは作家が書くものは、自分自身の経験である。だから芸術至上主義を奉じる者が、芸術には道徳的価値はないと主張したのは正しかったのだと言っている。換言すれば、創作の経験と表現は、創作者にとってどんな重大な意味を持とうと、他の者には価値がない。もし価値ありとすれば、その創作によって外面化せざるを得なかった作者の個性に対する興味というべきであると考えているのである。しかし Maugham は人間としての El Greco へは厳しい批判を忘れていない。彼は情熱的で空想的である。うぬぼれが強く、非常におしゃべりで、機知に富み、演技的である。深い洞察力と鋭敏な感受性によって、物の底に透徹することができるとしても、持前の軽薄さで、彼がそこから取出すものは、貴重な宝石ではなく、ビカピカした装飾品である。彼は創意に乏しいが、見事な彩飾にすばらしい才能を発揮する。彼は活力と光彩を有しているが、力強さを示すことは少ない。ひとり離れて、皮肉な態度で岸边に佇み、人生の河が流れてゆくのを見つめている。彼は意見というものは偏見にすぎないと思いこんでいる等々その欠陥を挙げているが、El Greco としてわれわれを驚かすし、事実多くの特質を持ち、そこに偉大さの秘密を見出している。

Maugham の眼は「悲痛な面持をした騎士」であるとともにサンチョ・パンザでもあったスペイン人、アメリカ大陸の国々を征服しながら、飢えていた国民、理想主義的、神秘主義的であるとともに冷笑的、現実的であった人間性にそそがれている。

「彼等の卓越性は、たしかにすばらしかった、だがそれは別の方面にあったのだ。それは性格の卓越性であった。この点においては、スペイン人はいかなる国民にも劣ることがない。わずか古代のローマ人が匹敵するぐらい

だと私は思う。この力強い民族のすべての精力、すべての独自性は、一つの目的、ただ一つの目的に向けられていたように思われる、つまり人間の創造である。彼等が優れているのは、芸術においてではない、むしろ芸術よりも偉大なものにおいて優れていたのだ——すなわち人間において。」という結びにこの一書を世に送った意味が明示されているとともに、彼の創作態度の源流を見る感じがするのである。聖 Ignatius, El Greco, 聖女 Teresa の個性が、よしんばそこにいくたの矛盾をはらんでいたとしても、作家 Maugham の琴線にふれるものを与えたことは疑うべくもない。

## II. Somerset Maugham と旅

特命を帯びてロシアに渡った Maugham は不幸にして結核が再発、Scotland や St. Moritz のサナトリウムで闘病生活に入ったが、二年が経過し全快した時、未知の国民の生活風俗に対する好奇心から中国旅行に出発した。 *The Summing Up* の五十五章に「わたしは旅行によって得ることのできる独特の利益を知った。それより以前は単なる本能的な気持だったのである。この利益とは、一方において魂の自由であり、一方においては、わたしの目的に役立つ時もあると思われる、あらゆる種類の人物の蒐集であった。その後も、わたしは、多くの国々を旅行した。定期船、不定期船、帆船で、十指にあまる大洋を渡り、汽車で、橋で、徒歩で、馬で旅行した。そして性格や奇癖や、個性に、たえず注意していた。」と言い、さらに「わたしはあまり見物はしなかった。世界中の大観光地には、あまりに多くの随喜の涙が注がれているので、わたしはそうしたものに直面しても、あまり随喜渴仰することができなかった。果樹の間にこじんまり重なりあっている木造の家とか、ココナッツに縁どられた小湾の曲線とか、道端の竹林とか、平凡なものが好きだった。わたしの興味は人間と、彼等が送っている生活にあった。」と自分の旅の述懐をしている。ここでも、彼のあくなき人間探究と創

作に役立てるための取材旅行であったことが判る。旅行自身に対する好奇心から、また役立ちそうな題材の仕入れのための旅行ではあったが、旅行の経験が彼の性格を徐々に形づくってきていることに気付くのである。文学者として退屈な生活をしているうちにいつしか出来上りつつあった円満さが、主角を取戻したということであった。

勿論、彼の旅には別の一面のあることも忘れてはなるまい。ロシア旅行を志す動機となった倦怠感解消の旅である。作家としての成功、その成功のもたらした優雅な生活、社交界、素晴らしい晩餐会、華やかな舞踏会、機知あふれる人間たちとの交際、生活の保証と気楽さが彼を窒息に追いこんでいた。当然の結果として、遠い国へ旅でもしたら、自分を一新できるかも知れないという心境になり、ロシアという巨大な国の情緒と神秘にひたる決心をしている。

このような ennui からの脱出の旅もあったにしろ、あくまでも小説家としての取材旅行であったことは否めない事実である。 *A Writer's Notebook* 中の取材メモ、及びそれをもとにして書かれている多くの作品を照合してみると、彼の旅は、異った風土の上に展開されているもろもろの人間の生態こそが、唯一の狙いであったことは想像に難くない。知り合いになれば自分の体験を豊かにしてくれる種類の人々との出会いを期待し、その期待は実現されている。

彼は自分の作品にたえず新しさを求め、衰えを防いで非常な努力を払った作家である。作品のみならず、現実の生活にも無気力を排除し、張りのある生き方を求めた。惰性に陥らぬ生活を求めて、冒険、旅行を渴望し、それが未知の国への旅となったのである。

*On a Chinese Screen* の序文に「一生涯に一度しか逢えないような人というものは、決して退屈なものではない。その人がどんな種類の人間だろうか」と推量したり、以前に遭遇した他の連中と較べてみたりするのは、なかなか興のつきないものだ。たいてい人間というものは少数の変種のタイプに自

ら分類されるものだから、初対面の人を見ても、待ちもうけていた特徴や癖を認める楽しみが味わえるわけである。そしてある画家の描いた画面が先入主となっていて、そこからあなたが、すでに知っていたと思うような自然界のある効果を、時々見かけるのと同じように、小説か何かで読んだことのある人物に現実世界で行きあたる場合もあるのである。」という言葉の中にも、旅において接する人間へ取組む作者の姿勢が明瞭に表現されている。

*Don Fernando* で El Greco を激賞していることは前述の通りであるが、芸術家の個性ということを強張している。ある芸術作品が、強力な感情を与えたあとでは、食べてしまった美味の食品の如く、もう一度それを捉えることはできない。ただ残っているのは、作品のうしろにある個性で、ある人々には、それが、芸術家の作品に対する大きな興味ということになる。人間は複雑極まるもので、その芸術家の作品をすっかり呑みこんであとも、なお続く興味となっているということを言っているが、作家自身の個性ということに常に意識していた Maugham の態度が、El Greco を評するにあたって出てきたと言える。そしてその個性の形成に果す旅の意味を例証する一つのエピソードにふれたいと思う。

それは1951年10月24日、London で催された National Book League の年次講演会で行った 'A Writer's Point of View' (作家の立場) という講演である。非常にユーモラスな話し運びとなっているが、彼の文学及び作家というものの見方が如実に示されていて注目に値する。ボストン在住でハーバード大学を出た作家志望の息子を持った母親との手紙のやりとりが語られる。Maugham は「息子さんに向う五年間、年五千ドルずつやって勝手にしなさいとおっしゃるんですね。」と答えてやる。結局何回かの手紙の往復の結果、母親から息子は小説家を断念して証券会社に入ったことを知らしてくるのであるが、このエピソードをもとに、小説家にとっては個性は商売道具みたいなもので、これを作りあげるために細心の努力がいる。経験がこちらへやってくるのを待っているのではなく、自分から探しに出かけねばなら

ぬ。芸術や文学について、ただ撫でまわしたというにとどまらぬ知識を持たなければ、個性の完成などあり得ないと語っていることから、彼の試みた旅は、よしんば小説の取材のためであったとしても、作家の個性の密度を高める目的でもあったと認めざるを得ない。

この小論を結ぶにあたって、M. K. Naik の travel books に関する見解を紹介しておこう。Maugham の旅行記は、彼自身の性格の二面すなわち皮肉と同情の不可思議な混合が現われているし、なかんづく、中国にビルマにスペインに Maugham とともに旅する読者は退屈することを知らない、何故ならば、彼の側にはもう一人の人間が付きそうている。そのもう一人の人間とは所謂メレディス流の “Comic Spirit” であるという。

For the student of Maugham, the travel books throw an interesting sidelight on the enigmatic mixture of cynicism and sympathy in him, because, in them, the reader travels through the land of Maugham's literary personality, and what he observes here reminds him of many familiar sights and landmarks that he has already seen in the novels and plays. Above all, there is not a dull moment for the reader who travels with Maugham, whether to China or Burma or Spain, for there is a “third who walks always” with him. The “third” is none other than Meredith's Comic Spirit which looks “humanely malign” and casts “an oblique light” on the motley crowd it surveys.<sup>(8)</sup>

### Bibliography

(Text は全部 Heinemann 社の版を使用)

The Collected Edition of W. Somerset Maugham

*The Summing Up*, 1964.

---

(8) M. K. Naik, *W. Somerset Maugham*, pp. 138-139.

*A Writer's Notebook*, 1952.

*Don Fernando*, 1961.

*Ah King*, 1967.

*The Travel Books*, 1955.

### Reference Books

M. K. Naik, *W. Somerset Maugham*, Univ. of Oklahoma Press, 1966.

Richard A. Cordell, *Somerset Maugham*, Indiana Univ. Press, 1969.